

実践例「学校・学級経営の深化・充実」

「課題3 地域に根ざし、家庭や地域と連携した開かれた学校・学級経営の創造」

I 学校名 本別町立仙美里小学校

II 学校の概要

本校は全校児童28名、1、2年生単式学級、3・4年生、5・6年生複式学級、支援学級3学級の計7学級の学級編制になっている。本校の8割近くの家庭が農業を営んでおり、畑作農家、畜産農家、2つを兼業している農家とさまざまであるが、子どもたちにとって農業は身近なものである。将来の農業の担い手として就農する児童も少なくない。そこで、本校では地域の農業を知り、より身近なものになるように、地域の農家に教育活動に手を貸していただきながら、農業体験を行っている。本校では、学校農園で、学級毎に野菜を育てている。多くの学校でも行っている学習だと思うが、学級毎に相談しながら植える作物を決めて活動をしており、秋には収穫した野菜や果物で調理をして、「植える→育てる→収穫」を行いながら、栽培活動を行っている。学級によっては、子ども一人一人に畑を割り当て、自分の植える作物を決め、植え方、育て方、調理法等を調べながらの栽培活動を楽しみながら行って来た。

III 実践事例

1 地域と一体となった農業体験活動

JA青年部の協力を得て、学校農園等の一部を使い農園活動を行っている。その活動を紹介したい。

(1) 学校農園・旧仙美里中学校の畑での農園活動

春に植える作物等の相談を青年部と行い、3年生以上の児童で行っている。3年前から学校農園と旧仙美里中学校の畑を借りて栽培活動を行っている。青年部の方々から植え方のレクチャーを受け、準備をしてくれた苗や種を植える作業から始め、収穫を行っている。畑の整備・維持等については、農業のプロの青年部が行ってくれている。(今年度は、スイートコーン・かぼちゃ・アピオス・ヤーコン・さつまいもを育てた。) 収穫した作物の一部は、学校で調理や持ち帰りをした。『土に触れる』『作物を植え、収穫できる喜びを味わう』ことをねらいとして行っているが、生育途中の段階は全てにおいて(防除や肥料をやるお世話等)任せてしまっている。以前は収穫後、どのように利用・調理するかを考えて作物を選定していたが、ここ数年は、新しい作物を育てる試みや販売を目的に青年部中心で育てる野菜を決めてもらっている。今後は、育てる過程もJA青年部と一緒に行う中で、さまざまな発見や苦労等も学ぶことができるように、さらに活動を深めていきたいと考えている。



(2)きらめきフェスティバルでの販売体験

参加できる児童を募り、収穫した農作物を9月の休業日に行われる町の「きらめきタウンフェスティバル」のJAの物販ブースで販売している。買ってもらうお客さんに見えるようなメッセージを書き一緒に販売することで、採れた作物が目の前で売れる喜びを味わっている。休日の活動になるため、全員が体験できないのが現状であり、今後の課題である。



(3)搾乳体験活動

学校近隣の農家の協力をいただき、搾乳体験活動を隔年で行っている。農家の仕事についての学習は3年生の社会科の学習で行っており、家で乳牛を育てている酪農家も多い地域だが、実際になかなか触れる機会がないのが現状である。搾乳は多くの家で機械化されており、手で乳搾りを行うことは多くないが、目の前の生き物に触れ、自らの手で絞った牛乳をいただき試飲する中で、酪農の仕事の一部を体験させてもらう貴重な機会となっている。



2 その他

(1)もちつき体験

町の「本別餅つき保存会」の協力でもちつき体験活動を隔年で行っている。大豆を石臼で挽いたきな粉と自分たちでついたつきたての餅を保存会、保護者および全校児童で食べる体験を行っている。

(2)陽だまりの里訪問

地域の施設を訪問し、お年寄りとのかかわりを持っている。3・4年生の総合的な学習の活動である。



3 今後に向けて

○人とのかかわり（児童・保護者・地域の人々）を通して、自分たちの地域のよさを見つけ、地域で育つ自分たちの姿を見つめ、個々の成長や地域の未来について学ばせたい。

○さまざまな活動体験の中で、心身共にたくましく生きる力を育てたい。